
鬼、来たれ！

サイトウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼、来たれ！

【Zコード】

N4130BA

【作者名】

サイトウ

【あらすじ】

石動圭は術士の家系に生まれたが、兄が行方不明となり、両親が死んだことで家は完全に没落していた。
圭は一般人として平凡な毎日を送っていたが、ある日、圭は公園でクラス委員長の佐藤美咲を正体不明の大男から助け……

序章　『人間狩り』

狩りは迅速に行わなければならない。

狩場の状態と獲物の行動パターンを見極めることも、ある程度の冷静さを保つことも重要だ。

けれど、何を心掛けているか？　と問われれば、彼はそう答える。次に重要なのは手加減だ。

最初は戸惑うばかりで、捕獲の仕方さえ分からずに早死にさせてしまった。

ようやくコツを掴んだのは獲物が十を越えてからだ。

捕獲したばかりの獲物は泣き喚ぐ。

やがて、自分の運命を受け容れて静かになる。

心の芯まで絶望に染まつたと言うべきなかも知れない。

けれど、絶望した獲物は長く保たない。

動かなくなれば使えそうなパーツを抜き取り、残りは捨てる。この半年は順調と呼ぶに相応しい時間だった。

そう、邪魔者が現れるまでは。

そいつは優れた狩人だった。

何度も、何度も追い詰められたが、幸運だったのはそいつにも邪魔者がいたことだ。

それも一人や二人じゃない。少なくとも二十人以上。

そいつは何度も邪魔者を蹴散らし、幾度かの戦いの末に動くのを止めた。

邪魔者と戦いながら自分を始末できないと悟ったからだ。

危うい均衡を保つ二つの勢力……その間を泳ぎながら今日も狩りを行わなければならない。

天秤が一方に傾けば、どちらかの勢力に殺されてしまうだろう。だから、今まで以上に真剣になるし、今まで以上に獲物を得た喜びが大きい。

楽しいのだ。

これほど充実した時間は今までの人生で一度もなかつた。

こんなにも真剣に生きようとしたことはなかつた。

何かを忘れているような気がしたけれど、忘れてしまつくらいなら大したことじやないだろう。

ゆつくりと巣穴から這い出し、月を眺める。

生きるために、人間狩りを始めよう。

序章　『人間狩り』（後書き）

精靈騎士ヴェルナ同様、某社に送つて、一次選考落ちした小説です
Orz
掛け合いで重点を置いたライトな小説を目指していたのですが
⋮。

第一章　『日常の終わり』

その日、石動圭は自転車を押しながら坂を上っていた。アパートを出てから三十分も経っていないのに汗だくだ。

夏の自転車通学は地獄だ。

肌を焼く日差し、高い湿度、古い自転車が体力を消耗させる。黄色の通学帽が数メートル先で揺れている。

集団登校する小学生だ。

元気に走り回る姿は活力に溢れている。

俺は無理だ、走り回る気力がない。

ギア付きの自転車に乗り換えたが、残念ながら懐具合に余裕がない。

石動圭は一般的な高校生よりも貧乏なのである。

十年前に兄がアメリカで行方不明になり、二年前に両親も仕事中の事故で死んだ。

資産家であつた両親は相当額の遺産を残していたのだが、後見人を名乗る親戚に奪われてしまい、圭の手元に残つたのは数冊の古文書と父親の手帳だけだ。

古文書は換金方法が分からぬし、父親の手帳は生前の交友関係が書かれているだけで金になりそうにない。

ほぼ無一文だった圭が郊外のアパートで一人暮らしができているのは兄の婚約者のお陰だった。

彼女が援助を申し出てくれなければ、養護施設の世話になつていただろう。

はあ、と圭は坂を見上げて溜息を吐いた。

「……坂が多すぎる」

坂の傾斜は緩やかなのに距離があるし、この街……大川市は平坦な道がない。

埼玉県大川市は東京まで私鉄で一時間弱、外秩父山地の外縁に位

置する今一つパツとしない街だ。

武蔵の小京都と呼ばれているらしいが、共通点は盆地特有のねつとりとした夏の暑さくらい。

古くから伝統工芸が盛んで、第一次世界大戦中は名産品の和紙を材料とした風船爆弾の工場があつたらしい。

要するに大川市は何処にでもあるような田舎町なのだが、学校の教師に言わせると昭和の雰囲気を残した街となる。

昭和と言う単語は讃め言葉じゃないような気がするのだが、大川市には古い家が多く残っている。

坂の上にある武家屋敷風の家もその一つだ。

「――モーニング！」

「おはようございます」

小学生達が元気よく挨拶するとエプロンドレス姿のメイドは掃除の手を休め、流暢な日本語で答えた。

セシル・ローランド……それが彼女の名前だった。

身長は日本人男性の平均身長を上回るくらい。

ボディーラインはスマートで、ビスクドールのように整った顔立ちは冷淡そのものだ。

彼女の人生じみた印象を際立たせているのが、肩の辺りで切り揃えられた白髪だ。

十年前、彼女は事故にあつた。

ニュース番組のトップを飾るような大事故で、彼女は数少ない生存者の一人だつた。

生き残つたことが奇跡なら、後遺症一つ残さずに回復したのも奇跡。

だが、その代償のように彼女は記憶と髪の色を失つた。

身元を証明する物は何一つなく、莫大な治療費まで支払う羽目になつた彼女に手を差し伸べたのが、シャノン・ローランド……彼女の旦那様である。

雇用関係における旦那様ではなく、結婚制度における旦那様！

英語だとハズバンド！

ちょっと控え目なオッパイが！

手を伸ばせば届きそうなオッパイが！

メイドさんのオッパイは既にシャノンさんのものなのである！
だがしかし、人妻である事実が新たな魅力を与えているのも事実
なのだ！

セシルさんのオッパイはメイドの従順さと人妻の淫靡さを兼ね備
えているのだ！

「おはようございります、圭様」

「オッパ、おはようございます」

ゲフン、と圭は咳払い。

「あ～、クリスは起きてますか？」

「……朝食の際は起きていたのですが」

「分かりました」

「毎朝、申し訳ありません」

「大事なクラスメイトなんで」

嘘じやないぞ、と圭は時代劇にでも出て来そうな門を潜つた。

ローランド邸は広い。

倉とガレージまであるのに土地が余るほどだ。

庭は日本庭園風……一年前は植木が複雑な陰影を生み出していた
のだが、今はこざつぱりしている。

枝ガ伸ビ放題ダヨ、と言つてシャノンさんが枝を切り落としたら
しい。

「シロとハイイロ、おはようさん」

ガウ！ と狛犬のように玄関に座っていた一匹の超大型犬が吠え
る。

名前の由来は毛が白いからシロで、灰色だからハイイロだ。

犬っぽいのは名前だけで一匹とも妙に立派な体格で凜々しい面構
えをしている。

ぶつちやけ、狼に見える。

怖いことになりそうなので考えるのを止め、圭は屋敷に上がった。屋敷の間取りは丁に近い。

短い線が玄関、土間、居間、台所、風呂、長い線は裸で区切られた八つの部屋だ。

圭は居間に入り、座椅子に座る少女を見つめた。眠っているのか、頭が不規則に揺れている。

名前はクリス。

腰まである長い金髪をツインテールにしている。

本人は触覚っぽくしたかつたらしいのだが、髪質のせいで力なく垂れている。

多分、ウサギの耳が自重に負けて倒れたらこんな感じ。

セシルさんの形質が遺伝しているらしく、無防備な寝顔は天使のように愛らしい。

「おい、クリス」

肩を揺すつてもクリスは唸るだけだ。

「……それにしても」

圭は深々と溜息を吐いた。

クリスは外国人に対するイメージを真っ向から否定するような未発達ボディーだ。

とにかく華奢で目を凝らして、ようやくオッパイらしき膨らみが確認できるくらい。

今も残念なことになつてているが、将来も残念さが継続しそうなオッパイなのだ。

何故、オッパイのサイズを遺伝させなかつた！ と遺伝子に説教してやりたくなる。

そんなことを考えているとクリスが恨めしそうな目で圭を見上げていた。

「何故、ワシの胸を見るたびに残念そうな顔をする」

「そんな顔してねーよ」

「まあ、良い」

クリスは億劫そうに立ち上がり、

「ワシの荷物を持たせてやるつ」

「お前は何処の貴族様だ」

言い返しながら、圭は床に放置された鞄を手に取った。

二人一緒にシロとハイイロ、簾で地面を掃くセシルさんに挨拶。我が物顔で荷台に座るクリスに苦笑、圭は自転車を漕ぎ始めた。

「仕事」と「こと」、見ている内にい、働く人にいなりたぐない！
なりたいな、なれないよ！「コネもスキルも足りないな！回るな、
地球！ 働く人になりたぐない！」

「朝っぱらからネガティブソングを歌うな！ 何だ、それは！」

「その昔、ＮＨＫで放送されていた『はたらくひとたち』の替え歌
じや。ワシの働きたくないと言つ気持ちを込めてみた！」

「どれだけ働きたくないんだ、お前は！」

「無論、死ぬまでじや」

「徹底してやがるな、おい」

「一生遊んで暮らせる財産があるのに父上は仕事を辞める気配がな
いし、母上は勉強しろとうるさいのだ。おまけに妹のカルは勉強つ
て楽しいよね、と目を輝かせる始末」

「何が不満なんだよ？」

「ワシの怠惰さが際立つて困るのだ。世界中の人都がワシと同じく
らい急け者であれば良いのに」

「のび太君みたいなことを言つてんじゃねーよ」

「だが、世界中がワシと同レベルであれば戦争がなくなるじやろ？」

「……お前は凄いな」

「そうじやろ」

誉めたつもりはないのだが、クリスは満足そうに頷いた。

ジョギングしている爺婆に怒鳴られたくないので藤山公園を大き

く迂回。

ブレー キを掛けながら坂を下つて いると 可愛らしくしゃみが聞こえた。

「クリス？」

「フリスクを噛むとくしゃみが出るのはワシだけかの？」

「俺は出ねーよ」

「ふむ、ワシだけかも知れんな」

益体もない話をしながら坂を下る。

長い坂を下れば、圭とクリスが通う大川高校は田と鼻の先だ。
県立大川高校は私鉄大川駅の裏手にある男女共学の普通科高校だ。
校舎は教室棟と特別教室棟に別れている。

体育館、格技場、図書館と部室棟はあるが、プールはない。
のんびりとした校風が災いして進学率は低め、部活動も活発な方

じゃない。

のんびり歩く生徒達を追い抜き、校舎裏の自転車置き場に自転車を止める。

いつも校舎裏はジメジメしていて、地面を踏んだだけで水が染み出していく。

人通りが激しい場所はグチャグチャ、それ以外の場所は分厚い苔に覆われている。

靴を汚したくないからと苔の上を歩くと高確率で苔が剥がれて転ぶ。

一度でも転べば普通のヤツは警戒するようになるのだが、一度も三度も無警戒に歩いて転ぶクリスみたいなアホもいる。

と言づか、一度も三度も転ぶようなアホはクリスだけだ。

「今日もご苦労、ケイ」

「偉そうにしないで足下に気をつける」

「一度も、三度も、天才であるワシが転ぶ……ツ！」

転びそうになつたクリスを圭は抱き留めた。

「お前が何度もスッ転ぶせいで俺の反射神経は超能力レベルだ」

「「」のワシが転ぶはずがなかろう！　これは……そうじや、これは甲斐甲斐しく送り迎えする下僕に対する御褒美じゃ！　びづじや、世界一の美少女を抱き締めた感想は？」

「筋っぽくて今一つ」

「ワシは特売の肉か！　大体、ケイはワシの何処に不満があるんじや？　ワシは大卒のインテリで、差別主義者でもない！　おまけに家は資産家で、ワシ自身もハイテクパテントで金持ちじゃ！　学歴、性格、金と三拍子揃つたパーフェクト美少女じゃぞ！」

「胸」

「貴様は胸にしか興味がないのか！」

「ない」

「ムキイツ！」とクリスは両腕を振り上げた。

面倒臭いので圭はクリスを抱き上げ、玄関で下ろす。

「ふむ、ワシの靴が汚れないように配慮したのだな」

「まあ、そんな感じ」

「偉いぞ、下僕！」

「バシッ！」とクリスが圭の尻を叩く。

いつから俺は下僕になつたんだろうと思わないでもない。

去年の四月にクリスに声を掛けたのが腐れ縁の始まりだ。

その時の刺々しい態度がツボに嵌り、話しかけている内に下僕扱いだ。

そんなことを考えつつ、自分の教室……一年A組に移動する。

予鈴まで十分くらい、圭は窓際の最後尾に座つた。

視線を傾けるとクリスがメガネを掛けた女生徒と何かを話していた。

メガネを掛けた女生徒は綾峰優花。

いつも自信なさそうに目を伏せ、話す時は声のトーンを抑え気味。髪型はボブカット風で、何処のクラスにも一人はいる地味なタイプだ。

だが、学校一の美乳の持ち主である！

歩く時は美乳を隠すよつに猫背気味！

ちょっとでも視線が胸に集中しよつものなら、頬を染めちゃうよ
うなヤツである！

ふと目が合い、優花が慌てて目を背ける。

「朝っぱらからガン飛ばしてんじやないの」

「見てただけだろ」

当たり前のように机に座る女生徒を圭は見上げた。

少女は両腕を組み、非難がましい目で圭を見下ろしていた。

彼女……佐藤美咲は空手部の次期主将でクラス委員を務める優等生だ。

髪は少年のようなベリーショート、顔立ちは整っている。

勉強も、スポーツも如才なくこなし、そこそこに人望も厚い。

何気にハイスペックなくせに派手さに欠ける。

オッパイも普通だ。

ここまで圭に何も感じさせないオッパイの持ち主は珍しい。
「不良のくせに」

どうも圭は一部の生徒から不良と認識されてるらしく、彼らの急先鋒に立つ美咲は意味もなく突っ掛かってくる。

「ちょ、そんな怖い目で見て、やる気？」

どうすれば誤解を解けるのだろう、と圭が考えていると美咲は机から飛び降り、拳を構えた。

腰を落とした左前構えはそれなりに見事なものだった。

戦えると思い込んでいた時点で美咲は自分の実力を過大評価しているのだが、指摘しても仕方がないので圭は両手を上げた。

「な、何よ、万歳三唱？」

「降参、空手部の主将とやり合つほど馬鹿じやない」
美咲は安堵した様子で拳を下ろし、

「良い？ 私はアンタが不良だからって遠慮しない。クラスの和を乱すような行動を取つたら許さないんだから」「へいへい」

英雄のよつに取り巻きに歓迎される美咲を横田に圭は深々と溜息を吐いた。

「毎朝毎朝、見事なツンデレっぽりじゃな」

「ツンデレ?」

「『勘違いしないでよね』と言いつつ、主人公にフォーリンラブなヒロインを差す言葉じや」

「ベジータか、鴨川会長みたいなもんか?」

「それの何処がヒロインじや!」

クリスが圭の首筋に手刀を叩き込む。

頸動脈から外れているし、非力なクリスに殴られても痛くない。

「作中で『勘違いするなよ』って言うじやん」

「お前は男をヒロインとして扱うのか!」

「最近はそう言つのが流行つていると」

「流行つてないわい! 少なくとも、お前が言つたキャラクターのカップリングはありえん!」

「……なるほど」

圭が相槌を打つた時、チャイムが鳴った。

クリスの部屋で読んだ漫画によれば、言われるがままに勉強しているヤツは思考が停止しているらしい。

けれど、上を目指すのならレールに乗るのが手っ取り早いし、レールに乗るために勉強しているヤツは現実を見据えているんじゃないだろうか? と圭は思つ。

だから、圭は隣で安らかな寝息を立てるクリスを無視して真面目に授業を受ける。

体育の後なので柑橘系の匂いが漂い、女生徒の下着が、下着がさ、ブラジャーのラインが透けて見えるのだが……無視だ、無視するべきだ。

セシルさんのオッパイと同じように手が届きそうで手が届かないオッパイなのだ。

だが、手が届きそうにならないからと鑑賞すら諦めてしまつのは如何なものか？

高校を卒業したら教師になる以外、合法的に鑑賞する術がなくなるのだ。

「あ、あの……石動君、先生の授業って分かりにくいですか？」

「あ？」

ヒツ、と女性教師は小さく悲鳴を上げた。

照り返しが少し強くて、先生の授業が分かりにくいつとかじゃないんで

「ごめんなさい、気が付かなくて……すぐにカーテンを閉めますから」

大学を卒業したばかりの女性教師は泣きそうな顔でカーテンを閉めた。

女性教師は場の空気を和ませようとしたらしくジョークを口にした。

乾いた笑いが教室に響く中、圭はノートを書き損じて舌打ち。教室が気まずい雰囲気に包まれ、女性教師は授業が終わると同時に逃げるよう教室から出て行つた。

「ちょっと、石動い！」

「あ？」

鬼のような形相で向かつてくる美咲に圭は氣の抜けた返事をする。「授業の邪魔ばっかしてんじゃないわよ！」

「しないだろ」「う

「授業中に余所見して、舌打ちまでするなんて授業を妨害しているようにしか見えないじゃない！」

ボリボリと頭を搔き、圭が立ち上ると美咲は拳を構えた。

言い争つのも馬鹿らしいので、圭は眠つているクリスの肩を叩いた。

「……おお、飯の時間じゃな？」

「ああ」

圭は短く応じ、クリスのナップサックを持つ。

重量があるのは一人分の弁当が入っているからだ。

「ケイ、屋上に行くぞ」

「おう」

あからさまに無視されたためか、美咲の肩が震えていたが、圭は黙つてクリスの後を追つた。

大川高校の屋上は昼休み限定で生徒に開放されているのだが、圭は一度も他の生徒を見たことがなかった。

高級そうな重箱に詰められた凄く手の込んだ料理を食べ終え、圭はクリスを見つめた。

クリスは途中で合流した優花の美乳を枕に就寝中だ。

勉強しているように見えないが、クリスは成績が良い。

理数系はトップ、暗記科目はパーソンクトだ。

気遣われてんのかね、と圭は重箱をナップサックに戻した。意外とクリスは気遣いのできるヤツなのだ。

セシルさんに一人分の弁当をお願いしてくれたり、夕食に誘ってくれたりする。

「……なあ」

「は、はい！」

圭が声を掛けると優花は上擦った声で返事をした。

「俺は不良だと思われているんだろうか？」

え？ と愛想笑いを浮かべたまま優花が動きを止めた。目が救いを求めるように忙しく動く。

「……そうか

「あ、あの、そんなに気にすることないと私はいます

「何でだろ？」

ええっ？ と優花は盛大に頬を引き攣らせた。

「それは、その」

「髪は染めてないし、授業は真面目に受けているし、掃除もサボっていない。眞面目に将来のことも考えているんだけど、共通の話題がないせいか？」

どれだけ共通の話題が重要なのが、クリスと優花を見ているとよく分かる。

共通の話題があるだけで異文化ゴミゴミケーションが成立しているのだ。

「あの、その……私も含めて、みんなは石動君が怖いんだと思います。でも、理由が分からなくて、それで不良だから怖いんだって安心したがってるんじゃないかな、って」

「昔の人気が訳の分からぬ現象を妖怪のせいにしたようなものか?」「多分、それに近いかも」

「その割にクリスは俺を怖がってないみたいだけど」

「クリスちゃんは物怖じしないって言うか、怖い物知りうつって言つか……だから、その」

「だから、俺みたいなヤツに進んで関わると」

ショックは受けなかつた。

やつぱり、と納得してしまつたくらいだ。

圭は黙つて空を見上げた。

六限、掃除、ショートホームルームを終えるとクラスメイトが散つていく。

「クリス、放課後はどうする?」

「今日は直帰じや。新刊も発売されていないしの」

クリスは漫画研究会に所属しているのだが、全く部活動に参加していない。

休んでもペナルティーを課せられないので幽霊部員=帰宅部として半ば黙認されたような雰囲気になつていてる。

「ケイ、食事は？」

「御相伴に預かりたい」

「うむ、母上に頼んでおく」

クリスはリュックから取り出したケータイを操作。一言、二言、セシルさんと会話を交わした後でケータイをリュックに戻した。

「快く引き受けてくれたぞ」

「ありがとな」

「下僕の世話をするのは当然のことだ」

圭は苦笑を返し、クリスの荷物を担いだ。

初めてクリスの部屋に誘われた時、圭の胸は甘酸っぱい予感に高鳴つた。

ピンクの妄想が現実になるかも知れないと期待した。
けれど、床に散らばるDVD-^RとHロゲーの箱はハードルが高すぎた。

今日も今日とてハードルを乗り越えられず、クリスの後ろ姿を眺める。

帰宅するなり、ちやぶ台に置かれた自作パソコンでHロゲーを始めるクリスは変だ。

ディスプレイを見つめながら薄笑いを浮かべる姿は百年の恋も冷めかねない。

ディスプレイの中で首輪をした女の子がバツクからヤラれていた。
何故か、パラメーターっぽいのが表示されている。

「どんなゲームなんだ、それ」

「調教ゲームじゃ。この娘とエロエロな行為をしてパラメータを上げると、エンドティングが分岐……そろそろエンドティングじゃな」

クリスがキーを押すと凄いスピードで文字が流れた。

「ケイ、調教は愛がなければいかん。愛するが故に行爲に及び、愛

するが故に嫌々ながらも行為を受け容れ、新たな自分を発見する…

： そのプロセスが重要じや。 刮目せよ！ 我が愛の形！」

スタッフホールが終わり……少女は薄暗い部屋にいた。艶のある拘束具に戒められた少女はフローリングの床に力なく横たわり、こちらを虚ろな瞳で見つめていた。少女が壊れたように童謡を歌い：

： フェードアウト。

「い、いかん、自我崩壊エンディングじや」

「今までの自分すら見失つてるじゃねーか！」

「だ、だが、無茶っぽいコマンドでも表示されれば選びたくなるのが人情ではないか。嫌と言われても、何度も繰り返して愛を確かめようと……裸で公園に連れ出したのがマズかったかの？ それとも、ピアスか？」

「お前の愛は怖すぎる…」

「ケイもやるか？」

「やらねーよ」

「なかなか面白いぞ」

「面白くても女の子の部屋でエロゲーをプレイする気にはならぬな」

圭はパソコンから伸びるLANケーブルを摘み、

「ネットゲームをやれば良いじゃん」

「ワシは一年も日本にいるのにユーカ以外に友達と呼べる人間がおらん」

「だから？」

「リアルで友達を作れないワシがネットゲームで友達を作る訳なからう」

言い切り、クリスは別のエロゲーを始めた。

クリスは変だが、とても楽しそうだ。

「あ～、ダメな人になりたいな」

「ワシがダメな人だと言いたいのか？」

「別に……DVD Rくらい片付けろよ。つーか、何が入ってんだ

よ

「動画サイトから落とした音楽ファイルが入つておる」

「犯罪じゃねーか！」

「ワシはアップロードなんてしておらんぞ」

「ダウンロード 자체が違法だ！」

「罰則規定がないから問題ない」

「大ありだろ！」

「そつは言つが、プレイヤーをインストールしたら動画サイトからダウンロードできるようになつてしまつたのだぞ？ 責任はプレイヤーの制作者にあつて、私は望みもしない機能を押しつけられた被害者だ」

「盗つ人猛々しいな、おい！」

「古来より日本にはこのよつな諺がある…… 盗人にも三分の理！」

「たかだか三分の理を振りかざして偉そうだ！」

「何なら財布を投げつけてくれても構わんぞ」

「財布ごと追銭を要求するのかよ！」

圭が叫んだ瞬間、スパン！ と襖が開いた。

廊下に立つていたのは小柄な……と言つても頭半分クリスよりも背が高い……少女だ。

ブレザーに包まれた肢体は引き締まり、猫科の肉食獸を彷彿とさせる。

髪は荒野の土のようなブラウン、肌は健康的な小麦色だ。手入れをしていないので眉は太め、ボーグッシュな魅力を持つた少女だ。

クリスの血の繋がらない妹でカル・ローランドである。

「ケイ兄ちゃん！」

パソコンを飛び越え、少女は布団に寝そべる圭にダイブする。

ドカン！ と内臓が破裂しそうな衝撃に圭は歯を食い縛つて耐える。

「エへへ、今日も一緒に御飯を食べるんでしょ？」

「いつも申し訳ないとは思つてゐるんだけぢれ」

「気にしなくても良いと思うよ。お父さんも、お母さんもケイ兄ちゃんのことを気に入つてゐるみたいだし、ボクもケイ兄ちゃんが大好きだもん」

「お、おう」

口籠もつてしまつたのは疚しい気持ちを抱いているせいだろうか。だが、パンツが見えそうな状況で疚しい気持ちを抱くなと言う方が難しいのではないだろうか？

カルは将来に期待が持てそうなオッパイをしている。

偶然にもオッパイに触れてしまつたことがあるのだが、内側に芯を残していた。

通説によれば芯が残つていると大きくなる可能性が高いらしい。いや、今も魅力的なのだ。

カルの少年のような体つきに軽い倒錯感を覚えるほどだ。

「ケイ兄ちゃん、痛かつた？」

「脳内でオッパイ祭を開催しているのではないか？」

「オッパイ祭？」

「一見、ケイはクールに見えるが、オッパイしか見ていないオッパイマニアだ」

カルは今一つ分かつていらないらしく首を傾げた。

「分からんのなら良い。ほれほれ、いつまでもジッとしておらんと部屋で宿題でもするが良い」

「分からぬ所があつたら教えてくれる？」

「いつでも聞きに来るが良いぞ」

「ケイ兄ちゃん、またね」

「縞パンか」

カルが襖を閉めた後で圭は小さく呟いた。

「何と言つか、ケイは病気じやな」

「男なら当然だろ」

「ケイの場合は度が過ぎておる。中学生のカルにまで欲情するくせ

に同級生のワシには何も感じんのか？」

「さつぱり」

「清々しいまでに言い切るの。やはり、胸のせいか？」
パソコンに向かいながらクリスは左右から胸を押し上げようとする。

けれど、寄せて上げるだけの贅肉がクリスにはない。

「脱ぐと格好良いと自負しているのだが

「俺も凄いぜ、腹筋が割れてるからな」

むううう、とクリスは不満そうに下唇を突き出し、圭の上に飛び乗つた。

衝撃はカルの時より小さい。

「お～、ガツシリした体つきじゃ！」

「これでも鍛えてるからな」

調子に乗つてロデオマシンっぽく動いていると襖が開いた。

圭とクリスが反射的に視線をスライドさせると、セシルさんと田が合つた。

突っ込んでくれれば気も楽なのだけど、セシルさんは無表情だ。
気まずい沈黙が舞い降りる。

「……お醤油が切れてしまつたので買ってきて頂ければ」

「ち、違うのだ、母上！」
これは疚しいことをしていたのではなく

「そうです、違うんです！」「これはクリスが『ワシには何も感じないのか』って乗つてきて！ 脱ぐと格好良いとか！」

「清々しいまでに墓穴を掘つてあるぞ、ケイ！ ブラジルまで突き抜けそうじゃ！」

「……醤油」

「はい」

圭とクリスは互いに田を逸らしながら立ち上がつた。
クリスが細い肩を震わせながら出て行く。

「圭様、これを」

「あ、はい……っ！」

圭は千円札を受け取り、息を呑んだ。

一つに折り畳まれた千円札の間にゴム製品が挟まれていたからだ。

「え？　ええつ？」

「避妊はすべきではないかと」

「俺とクリスはそんな関係じゃ」

「そんな関係でないのなら尚更」

「あ、あの、セシルさん？」

「私は一人を信じておりますが、その気がなくとも若さ故に過ちを犯す可能性は否定できません。むしろ、若い一人は知的好奇心と性欲の赴くままに行動してしまうと考えるべきかと」

「それは信じてないんじや？」

「あくまで保険と考えて頂ければ。もつとも、遊び半分で娘に手を出すようであれば」

「て、手を出すようであれば？」

スウツとセシルさんは目を細め、凍てついた指先で圭の首筋に触れた。

「……地獄に落ちます、この世界に生まれてきたことを後悔するほどの痛みと絶望を味わいながら」

ガクガクガクッと膝が震えた。

胃袋が鉛に変わり、直腸を押し下げるような感覚。

「娘に手を出す時は本気でお願い致します」

「は、はい」

千円札とゴム製品を財布にしまい、圭は玄関に走った。

駅前のヤオコーで醤油を買い、外に出ると星が瞬いていた。

昼間よりも気温は下がつたものの、高い湿度は健在だ。

圭は荷台にクリスを乗せて自転車を漕ぐ。

「日本の夏は蒸し暑いの」

「俺は、もつと暑い」

「ワイシャツが汗に濡れて重い。

濡れた制服のズボンが足に絡み付き、トランクスの中が痒い。

「つーか、尻が痒い。」

「ケイ、近道じや！」

「藤山公園は自転車の乗り入れ禁止だっての。しかも、痴漢が出て

つて噂じゃねーか」

「ここの時間帯なら誰もおらん。痴漢とて自転車に乗つていれば大丈

夫じや」

「どんな理屈だよ」

とは言つたものの、藤山公園を突つ切ればかなり時間を節約できる。

腕つ節はそれなりにはずだし、ホッケーマスクの殺人鬼が出て来ない限り大丈夫だろう。

クリスが言つた通り、公園内には誰もいなかつた。死にも似た静寂が予兆のように藤山公園を包んで、「ファミコンウォーズが出ーるぞ！ ファミコンウォーズが出ーるぞ！ こいつはどうらいシミコレー・ショーン！ やーー！ のめり込むー のめり込むー！」空氣を読まないクリスのせいで色々と台無しだつた。

「突つ込みがないと寂しいんじやが？」

「元ネタが分からなくて突つ込めねーよー！」

「ケイが無知なだけではないか？ この前、ワシはクラス担任とファミコンのマリオブラザーズや初代ガンダムの話で盛り上がりつつたぞ。伝説の巨人イデオンのジェノサイドエンディングについても激論を交わしたな」

「クラス担任は四十歳！」

「ワシに死角はない」

寒気を覚えたのは公園の半ば、圭は思いつきブレーキを握り締

めた。

茂みから人が飛び出してきたのだ。

自転車の後輪が横滑りして、クリスが振り落とされそうになる。舌打ちしながら圭は右足を軸に体勢を立て直した。

「危ないだろ！」

驚いたのはそいつも同じだったのだろう。

そいつ……佐藤美咲は無様に転倒し、青ざめた顔で茂みを指差した。

あ？ と圭は茂みを見つめて絶句した。

コートを着た大男が拳を振り上げていたのだ。

グシャリと一撃で押し潰された。

無惨に抜けた骨格が白々とした街灯の明かりを浴びて浮かび上がる。

濃密に立ち込める臭いは……買ったばかりの醤油のそれだ。

「危ねーな」

クリスを脇に抱えたまま、圭は男を睨み付けた。微かに生ゴミが腐ったような臭いが漂っている。

男の体臭なのか、血肉の臭いなのか、どちらにしても面白くないことになりそうだ。

「チツ、仕方ないか」

後退つた圭の手を美咲が掴んだ。

顔面蒼白、今にも泣き出しそうだ。

「アンタ、私を置いて逃げるつもりでしょ！」

「アホか！ 戦おうとしてたに決まってるじゃねーか！」

「あんなバケモノにアンタが勝てる訳ないじゃない！」

「だったら、俺の手を掴むな！」

「こんな状況じゃなかつたら、あなたの手なんて掴まないわよ！」

「この藁！」

「どうでも良いが、来ておるぞ！」

美咲の腕を掴み返し、圭は大きく跳躍した。

「 「……つ！」

クリスと美咲が大きく目を見開く。

二人も坦いだ状態で十メートル近い跳躍をしたのだから驚くのも無理はない。

「ここで大人しく待つてくれよ」

「ちょっと、マジで戦うつもり？」

「だから、最初から戦うつもりだって言つただろ！」

一人から離れ、圭は改めて大男と対峙した。

多少の心得があると言つても実戦は初めてだ。

逡巡している内に大男が動いた。

戦術は稚拙で腕を振り回しながら突進するだけだ。
けれど、腕が旋回するたびに頬を打つ風が破壊力を物語る。
多分、まともに殴られたら動けなくなる。

「……ら、あつ！」

圭は旋回する腕を潜り抜け、渾身の蹴りを放つた。
腰の捻りを利かせたお手本のような前蹴りだ。

多少の体重差があつても、大抵の相手は止まるはずなのだが、大男は前蹴りをものともせずに両腕を振り下ろした。
ダブルスレッジハンマー……組んだ両手を相手の背中に叩きつけるプロレス技だ。

一瞬、頭の中が真っ白になつた。

こんな時にプロレス技を使う馬鹿がいるのか？

いや、俺がガキの頃に小指を骨折しただけで意外に実戦的な技なのか？

「……ツ！」

ダブルスレッジハンマーがアスファルトを砕き、散弾のように飛び散った破片が圭の首筋を掠めた。

傷を抑えながら、圭は大男から離れる。

「今まで逃げてるつもりじゃ！ 反撃せんか、反撃！」

ギャラリーは気楽で良いよな！ と圭は大男の懷に飛び込み、下

段回し蹴りを叩き込んだ。

ゴムの塊を蹴ったような感触に顔を齧める。

「ケイ！」

クリスの叫び声で我に返った時には遅かった。

咄嗟に跳躍したが、それに合わせるように大男が足を踏み出す。避けられない！ と覚悟した次の瞬間、衝撃が下腹部で炸裂した。嘔吐感に耐え、圭は大男の間合いから逃れる。

吐息が血生臭い。

目の前がチカチカする。

たつた一撃で足にまでダメージが来てる。

「……ゆ、油断した」

「戦っている最中に動きを止めるからじゃ！」

「初めての実戦なんだから、仕方がねーだろ！」

クリスと美咲の所まで戻つたことを讃めて欲しい。舌打ちし、圭はポケットから財布を取り出した。

「今更、金を渡しても逃がしてくれそうにないぞ」

圭は財布から取り出した和紙を指で挟むように構えた。

財布の中身……数枚の千円札が風に飛ばされ、硬化がアスファルトに落ちて澄んだ音を立てる。

できれば距離を取りたいが、

……雑鬼召還！

ドクンッ！ と心臓が大きく鼓動する。

赤く染まつた視界が空間に残留する気を捉える。

気は万物の根源、森羅万象に宿るエネルギーだ。

石動の術士は気を視覚的に捉え、規則性を与えることで様々な現象を引き起こす。

圭は薄墨のような気を符に導く。

……『礫』！

密度を増した気が炎のように符を包み、ふわりと浮かび上がる。グジュグジュと赤い粘液が符から溢れ出し、ソフトボール大の球体を形成する。

『礫』は圭の命令に従うだけの最低ランクの式神だ。攻撃力は高い方ではないが、何度も攻撃が可能だ。

「行け！」

圭の命令に従い、式神は鋭い牙を打ち鳴らしながら大男に襲い掛かつた。

大男は式神を叩き落とそうと腕を振り回す。

だが、式神は大男の腕を擦り抜け、首の肉を食い千切る。致命傷にも関わらず、大男は痛みを感じていないかのように腕を振り回した。

血さえ流れていないのでから、真つ当な人間じゃないのかも知れない。

大男が式神である可能性も否定できない。

「戻れ！」

あえて声に出し、圭は式神を引き戻した。

式神を大男との間に割り込ませ、圭は口の端を吊り上げる。

余力があると思い込ませるためにありつたけの力で虚勢を張る。どれくらい睨み合っていたのか、先に動いたのは大男だった。一步、二歩と後退り、圭に背を向けて逃げ出したのだ。

大男の気配が完全に消え去つてから圭はその場で尻餅を突いた。

「ケイ？」

「悪い、英世さんと小銭を回収してくれ

「委員長、貴様も探し

「わ、分かつてるわよ」

無理だろうな、と圭は溜息を吐いた。

クリスが集められたのは千円札一枚と数枚の硬化だけだった。

ふと見上げると鬼のよつたな形相で美咲が圭を睨んでいた。

原因は美咲が汚らしそうに摘んだゴム製品だ。

「待て、お前は勘違いをしている」

「何がよ？」

「それは娘に手を出す時は本気でお願い致しますとセシルさんから預かつたものだ」

「避妊くらいしなさいよ、このサル！」

美咲は頬を引き攣らせ、思いつきり圭の頬を殴つた。

「ケイは魔法使いなのか？」

「あ？」

そんなことをクリスが言つたのは美咲をバス停に送り届けた後だ。思わず、問い合わせるとクリスに後頭部を叩かれた。

大男に殴られた腹も、美咲に殴られた頬も痛い。

それでも、クリスをおんぶする自分は偉いと思う。

「魔法使いつたではないか。あれか？ 夜な夜な街を徘徊するバケモノを退治したり、魔法使い同士で殺し合いを繰り広げていたりするのか？」

「魔法使いつて言えば、魔法使いになるんじゃねーの？ 半人前だから術士同士で殺し合つたり、バケモノ退治なんてしたことねーけど」

「あれだけ戦えるのに半人前なのか？ 今から修行をすればワシでもあれくらい戦えるようになるか？」

「俺の力ってのは血に宿つてゐるから無理だろうな……痛つ！ いきなり噛みつくな！」

いきなりクリスに噛みつかれ、圭は叫んだ。

「血を飲んだだけでは無理か」

「その理屈だと鳥を食つたら羽が生えるじゃねーか！ 要するに遺

伝。御先祖様に氣を見るヤツがいて、そいつの特性を受け継いでいるんだよ」

「氣など実在するのか？」

「俺にも詳しい理屈は分からぬ一けど、見えるんだから実在してるんだろ。まあ、同じ一族でも同じように見える訳じやないみたいだから、理屈で説明できないのかもな」

「どう言つことじや？」

「俺は薄墨みたいな感じで氣が見えるんだが、俺の兄貴は人によつて氣の色が違つて見えたらしいんだよ。それだけじやなくて、魂みたいなモノも見えたっぽい」

「らしい？ っぽい？」

「だから、俺が見てるものと違うんだよ。俺は氣が人間の体に詰まつていて、なくなつた分だけ補填されてるように見えるのに、兄貴は魂みたいなモノが氣を生み出してるって言つてたからな」

「う～む、量子力学チックじやな。この世界そのものが重ね合わされた状態で観測した瞬間に収束しているのかも知れん。しかも、兄弟でも見え方に個人差がある。ふむ、これは調べる価値がありそうだじゃ」

「そんな大層なものか？」

「大事じや。この世界そのものが観測された結果として物理法則を保つているのだとしたら物理法則なんぞ破綻してしまうぞ」

「俺にしてみたら物理法則が曖昧なんてのは当たり前のことで、破綻しにくいつてのも当たり前のことなんだけどな」

「ていつ！」

「ぽかん！」と頭を小突かれ、圭は小さく呻いた。

「当たり前はどういうことじや」

「昔はバケモノ退治の依頼が多かつたらしいんだよ。けど、今は最盛期の千分の一くらいまで減つてる。これは俺の解釈なんだが、科学的な考え方が浸透してバケモノの生まれる余地つてのがなくなつてるんじやねーかな？ 人間の無意識が物理法則を補強してると考

えれば、説明できるだろ」

「疑似科学みたいな話じゃな」

クリスは納得していないうだ。

「あの大男は何なのだ？」

「さあ？ ドーピングのせいで脳みそまで筋肉になつたヤツか、俺みたいな術者のなれの果てか、俺の御先祖様みたいに覚つちまつたヤツなのかも知れねーな。純粋なバケモノつて可能性もなくはないけどな」

「戦うのか？」

「戦わない。戦う義理も義務も命の遣り取りをする覚悟もない」

「むう、学園伝奇バトルを期待していたんじやが」

「申し訳ねーけど、正義のために戦えるほど俺は善良じやないんだよ」

坂を上り、門を潜ると、

「ケイ兄ちゃん！」

ドカッ！ とカルが圭に突っ込んできた。

普段なら耐え切れたはずの衝撃だが、圭は意識を失った。

時々、行方不明になつた兄を思い出す。

病弱な兄は白い寝巻姿で寂しそうに庭を眺めていた。

肌は上等な和紙のように白く、髪は首筋に掛かるほど。汗で濡れた首筋を今でも夢に見る。

「……あ？」

目を覚ました圭はしばらく天井を見上げていた。

蛍光灯の白々とした光が目に痛い。

どうやら、気絶していたらしい。

「目を、覚ましたか？」

「あ、セシルさん」

「……一時間ほどになります」

枕元に正座していたセシルさんは圭が問い合わせるよりも早く答えた。

「あー、この格好は？」

今の圭はトランクスとTシャツ姿だ。

問題はトランクスとTシャツが圭のではないことでも、どのよくな経緯で着替えさせられたかでもない。

誰が着替えさせたか、である。

「……娘達が濡れたタオルで額を冷やすんだと張り切り、バケツの水を掛けてしまったので私が」

圭は言葉に詰まった。

気まずいのはセシルさんも同じらしく頬を紅潮させ、恥ずかしそうに俯いている。

「見られちゃいました？」

「……っ！ そ、それは……夫が帰つておりませんし……夏とは言え」

息を呑み、セシルさんは言い淀んだ。

「冗談つぽく言つたつもりなのだけれど、セシルさんは首筋まで真っ赤になつてゐる。

セシルさんがなおも言い募ろうとした時、静かに襖が開いた。

「ケイ兄ちゃん、怒つてる？」

カルが怯えているかのように顔を覗かせる。

精神的に幼い彼女は人間関係が壊れることを恐れている。きつと、カルは人間関係の脆さを知つてゐるのだ。

「怒つてないよ」

「ホントに？」

「本当に。さつきのは少し調子が悪かつただけでカルのせいじゃない。だから、今日は勘弁して欲しいけど、いつもみたいに元氣に体当たりしてくれると俺も嬉しい」

「うん、ケイ兄ちゃんが元気になつたら体当たりするね！」

「ケイのお陰でカルも元気を取り戻したようじゃな……何故、母上
が顔を赤らめて硬直しておる?」

カルと入れ違いにクリスが顔を覗かせる。
多分、カルに付き添っていたのだろう。

「ふむ、あやしいの?」

「コホン……圭様、夜も更けて参りましたのが如何なさいますか?」
「泊まつていけ、ケイ。最近は何かと物騒じや」

公園の出来事は話していないってことか、と圭は推測する。
では、夕餉の準備が整うまでお風呂に入られては?」

「お言葉に甘えます」

「クリス、浴室まで案内を」

「うむ、こいつちじや」

立ち上がり、圭はクリスを追つ。

クリスは入浴を済ませたらしく、白いロングTシャツ、ツインテ
ールも解いている。

「セシルさんに何て説明したんだ?」

「自転車を盗まれたと説明したんじやが、セシルは嘘に気付いてい
るな……こじりじゃ」

浴室は玄関の対面……と言つても玄関からは見えないようになっ
ているが……に位置している。

「ワシは部屋にあるからな」

「了解、了解」

圭は洗濯かごに下着を脱ぎ捨て、浴室に入った。

浴槽は半植え込み式の檜造り、床と壁はタイル張りだ。
圭は木桶で湯を掬い、ゆっくりと肩から掛ける。

湯の温度は適温、ヒリヒリと痛むので視線を落とすと大男の攻撃
を受けた箇所が赤黒く変色していた。傷み始めたバナナの皮に似て
いなくもない。

「……何だかなあ」

湯船に浸かり、圭は呟いた。

ふと圭は視線を傾け、誰かが洗面所にいることに気付いた。
クリスか？いや、話の流れ的にカルかも……いやいや、セシル
さんかも知れない。

水を掛けてしまつたお詫びに背中を流しに来ましたみたいな！

そうだよ、それ！

そうに違いない！

ガラガラと浴室の扉が開き、頬を緩ませた圭は振り向き、

「デカツ！」

「カミツキガメを発見しました！」

「外来生物法に基づき冷凍処分をお願いします！」

「ヤア、ケイ君。背中ヲ流シニ來タヨ」

「え？ ええつ？」

「カミツキガメの本体……シャノンさんは親指を立て、男氣ある笑みを浮かべた。

シャノンさんの身長は圭よりも頭一つ分高い。

肩幅が広く、ガツシリとした体格だ。

アメリカのホームコメディにでも出て来そうな陽気な一枚目と言つた感じ。

「大丈夫、拙者ハ日本通テゴザルヨ」

「拙者と言つてる時点で危険な予感が！」

「ドレクライ日本通カト言ウト……子ドモト一緒ニ風呂ニ入ツテモ
虐待扱イサレナイ、娘ガ男友達ヲ連レテ来タラ背中ヲ流スト知ツテ
ルヨ」

「二つ目は違う…」

「サア！」

圭はシャノンさんに腕を引かれ、檜の風呂イスに座らされた。

「才客サーン、何処カラ来タノ？」

「それも違うし！」

シャノンさんの微妙なギャグに耐え、シャノンさんの背中を流し
……何故、俺はクリスの親父さんと浴槽に入っているんだろう?
そんなことを考えつつ、圭は隣でハミングするシャノンさんを見
つめた。

「……この曲」

「歌ハ良イネ、歌ハ心ヲ潤シテクレル」

「親子揃つてオタクかよ！」

「ハハハツ、チョット小粋ナアメリカンジョークネ」

「アメリカじゃなくて、日本だよ！」

バシャとシャノンさんは呑きつけるようにお湯を自分の顔に掛け
た。

「コレデモ、君ニ感謝シテイルンダヨ」

「感謝されることなんてしていませんよ」

「ズット、クリスハ難シイ子 NANDAト思ツ テタ」

シャノンさんは遠い目をして言つた。

「……トテモ後悔シテイルヨ」

シャノンさんが何を言いたいのか、圭はよく分からない。
多分、シャノンさんは自分勝手な思い込みでクリスを傷つけたこ
とを心の底から後悔しているのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4130ba/>

鬼、来たれ！

2012年1月10日22時49分発行